

除疫呪符についての一考察

——その縁起譚の比較を通して——

宮本 升平

目 次

はじめに

一 蘇民将來說話の基本的モチーフ

二 除疫呪符の縁起譚に関する比較

(一)「釣船清次」の縁起譚

(二)越前湯尾峠の孫嫡子

(三)「ささら三八」の縁起譚

(四)若狭国組屋六郎左衛門

結びにかえて

はじめに

疫病除けの利益を持つといわれる呪符は、日本各地に幅広く、そして数多く分布している。これは、明治期にまでさかのぼることができる西欧医学の移入・発達による疫病撲滅以前の、疫病対抗策の名残りとも捉えられる。その対抗策の根幹をなしているのが、宗教や俗信である場合が多く、その裏には疫病の基と観念されていた、疫神の思想が流れている。

この疫神思想は必ずしも日本古来のものではない。おおよそ大陸からの宗教や思想の影響によるものであり、平安時代の陰陽道の隆盛などを経て、近

世には疫神の性格や容姿が明確になったようである。大島建彦の『疫神とその周辺』を参考に、筆者なりにまとめると、疫神は(1)人の姿をしていることが多い、(2)中でも老人や子供の姿をしていることが多い、(3)数人連れ立っていることが多い、(4)遊行的性格を持つ、(5)身なりが貧しいことが多い、(6)福神に転化するなどの特徴を持つ存在といえる⁽¹⁾。その中で最も重要な項目が、(6)の福神への転化である。それについて柴田実は、疫病流行という祟りを鎮めるために御霊や疫神を祀っていたものだが、そのうち畏怖の念よりも、その大きな神威への信頼が強くなることによって起こったものとしている⁽²⁾。いずれにせよ近世は疫神思想の隆盛期といえるのであり、それに伴って「疫神の説話」が多く発生したものと考えられるが、そのモチーフや構成要素の比較・考察が小稿の目的にはほかならない。

近代以降の西欧医学の輸入により、疫神思想は徐々に後退していったものと思われるが、依然として撲滅できない疫病は存在しており、それらに対抗する場合には疫神・神仏に頼るといった方法もとられたのである。日本における医学の実際の飛躍的發展は、第二次大戦後になってからであり、それでもなお「疫病(神)送り」や「人形道祖神」、「道切り縄」など民俗的事象の中に疫神思想は息づいており、現在も伝承されているのである。ちなみに、筆者もその事象の一例として、「蘇民将来符」と呼ばれる呪符を取り上げ、その形態と分布についてまとめており⁽³⁾、それとの関連から本テーマに取り組むことになった。

なお、小稿が分析対象とするのは、その疫神思想を受け継ぐ民俗事象の一つである「除疫の呪符」とそれに関する縁起譚・説話である。しかし、ここで注意しなければならないのが、除疫の呪符と言った場合、疫神に本来関係のない神仏の利益・効力に頼るものも含まれてしまうことである。つまり、厄除けで名高い社寺などで厄除けの呪符などと共に頒布されている除疫の呪符などのことである。こういった呪符は、疫神思想の流れを汲むものではないと判断して、今回の研究では対象としないこととした。いずれ機会を見て取り上げることにしたい。

それでは疫神とは何かと言えば、疫病を流行らせたり、逆にそれを止める

ことができる存在、またはそれに準じた存在であり、疫病を司ること以外の靈験は現さないといったことが挙げられると思われる。そして、この疫神の靈験を約束するものとして、除疫の呪符があり、それには必ずといっていいほど、その縁起譚・由緒といったものが付随している。さらに、それらの縁起譚の中心をなすものが、疫神を何らかの形でもてなすことにより、疫病から免れさせてもらったとする「疫神歛待譚」である。小稿では、呪符と不可分の関係である歛待譚のうち、筆者の以前からのテーマである「蘇民将來說話」を中心として分析を試みたい。蘇民将來說話は、除疫の呪符を生み出した疫神歛待譚の中で、いかなる位置にあり、数多い類話にどのような影響を与えたのかを探っていきたいと思う。その際に縁起譚（説話）のモチーフ、構成要素と合わせ、その利益（靈験）や祭祀方法なども視野に入れて比較することにしたい。ただし紙面の関係上、その靈験の内容は「疫病除け」、祭祀方法は「戸口に貼付、またはそれに準ずる方法」に当てはまる除疫呪符を取り上げていく。

一 蘇民将來說話の基本的モチーフ

他の除疫呪符との比較分析に先立って、先ず蘇民将来譚の分析から手掛けることにしたい。周知の説話ではあるが、手続き上あえてここに記載することにしたい。ただし、蘇民将來說話には多くの類似した話が伝承されていることから、ここでは、『備後国風土記逸文』原文と⁽⁴⁾、その意識（筆者による。注を含む）を取り上げる。

疫限国社 昔北海坐志、武塔神、南海神之女子伎、與波比爾出坐爾日暮、彼所蘇民将来二人在伎、兄蘇民将来貧窮、弟将来富饒、屋倉一百在伎、奚塔神借レ舍所、惜而不借、兄蘇民将来借奉、即以ニ粟柄一為レ坐、以ニ粟飯等一饗奉、饗奉既畢出坐後爾、經年率ニ八王子一還来而詔久、我将来之神為ニ報答一曰汝子孫其家爾在哉止問給、蘇民将来答申久、己女子與ニ新婦一待止申、即詔久、

以二茅輪一令レ著二於腰上ー随レ詔令レ著、即夜爾二蘇民與二女人二人ー乎置天
皆悉許呂志保呂保志天伎、即詔吾者速須佐能神也、後世に疫氣在者汝蘇民將
来之子孫止云天以二茅輪一著二腰上ー詔、随レ詔令レ著、即家人在者將レ免止詔支

疫隈の国つ社（の由緒）。昔、北の海にいらっしゃった武塔神（牛頭天王
の変化した姿といわれる）が、南の海の神の娘を嫁に貰いに行く途中、日が
暮れた。そこには蘇民将来（をはじめとする）二名の者（一方は弟）が住ん
でいた。兄の蘇民将来は貧しく、弟の（巨旦）将来は金持ちで、建物や倉を
百も持っていた。武塔神は宿を借りようとするも、（弟は）惜しんで貸さな
かった。（一方）兄の蘇民将来は承知して粟のワラを敷き、粟の飯でもてな
した。

年が経って（武塔神は）八人の王子を率いて（蘇民将来の所へ）戻って来
て、『昔、世話になった）蘇民の恩に報いよう、家にお前の子や孫はいるの
か？』といった。蘇民将来は『私には妻と娘がおります』と答えた。すると
（神は）、『茅の輪を腰に付けなさい』といて、その夜（のうちに）蘇民と
（妻と娘の）女性二人を残して（巨旦将来の一族の）全員を殺して滅ぼして
しまった。そして神は『私は、実は速須佐能の神（＝素戔鳴尊）である。こ
の後、疫病が流行ったなら、お前たち（一族の者）は蘇民将来の子孫だと
言って、茅の輪を腰に付けなさい。言うとおりにすれば、お前の家の者は
（疫病から）免れられるだろう』といった。（その神や彼らを祀ったのがこの
社なのだ）

ちなみにこの疫隈国社は、志賀剛による広島県福山市王子神社がそれに当
たるという説をはじめとして諸説がある⁽⁵⁾。

この説話の基本構造は、外部からやって来た強力なる神、いうなれば客
神・遊行神をもてなすことにより、そのお礼に神から除疫の方法を授かり、
果たして主人公らは、殺戮（疫病による大勢の死を表現したもの）・疫病の
難から免れることが出来たとするものである。これらをもう一度整理すると、
以下のようになる。

- (1) 外部からやって来た(強力なる)神(=客神・遊行神・来訪神)の登場。
- (2) 主人公による神へのもてなし、施しなどの作善。
- (3) そのお礼として、神が除疫の方法を主人公に授ける。
- (4) 除疫の方法とは、ある表示をすることで、他の者(他の家)と区別させ、その家には疫神・疫病が侵入しないというものである。
- (5) よって、その方法を行うことにより、誰でも除疫することができるようになる。

以上のモチーフを、本論では仮の基準モチーフとして定め、分析を進めていきたい。ただし、前記した事項と関わることであるが、これらのモチーフは呪符の分析のために設定したものであり、説話自体を対象にしたものではない。つまり、説話が存在しても、それによって生成された呪符がない場合は、その分析対象とはしない。次章では、大島建彦の『疫神とその周辺』を中心資料として、各例を取り上げながら検討を加えていくこととする。

しかし、それに先立ってこの説話の成立年代についての考察をしておかなければならない。小稿で取り上げた『備後国風土記逸文』は、鎌倉時代成立説があるなど成立年代が特定されていない⁽⁶⁾。だが、平安時代成立の『伊呂波字類抄』(1144年成立)にも蘇民将来譚が記載されていることや、9世紀の遺跡から蘇民将来符が出土していることから考えても⁽⁷⁾、蘇民将来説話の成立は少なくとも、平安時代中～後期と言えるであろう。

二 除疫呪符の縁起譚に関する比較

(一) 「釣船清次」の縁起譚

まずは呪符「釣船清次」の説話に注目してみたい。この説話は、かつて東京都中央区新富町にあった⁽⁸⁾、釣船神社の縁起譚として伝えられてきたものである。神社に対する信仰や組織については、大島建彦によってすでに報告がなされている⁽⁹⁾。しかし、今回は長沢利明の「釣船神社の系譜」⁽¹⁰⁾を基本

資料として進めていきたい。では次にその内容を見ていく。

江戸時代の寛政年間、当時南八丁堀で釣り船を営んでいた（釣船）清次が品川沖で釣りをしていると、海の中から「異容の神人」が出現し、お前の釣った魚が欲しいといった。清次は恐れ畏まって、魚を全て異人にあげてしまった。すると異人は（自分が疫病神だと名乗って）お礼として、昨今江戸の町に疫病が流行っているが、それを免れる法を授けるといって、海水で船板に文字「つりふねせいじ」を書いた。これと同じように書いて戸口に貼っておけば、疫病に伝染しないといった。それから、今後は私を祀るようにと言ひ残して、消えていったという。果たして、神人の言うとおりにすると、その効果は目覚ましく、時の町奉行から「人民救助」の一端として、この「釣船清次」の守り札が認定を受けたほどであったという。

この縁起譚は、大島建彦が指摘しているように、太田蜀山人の『半日閑話』や山中共古の『共古随筆』などにも取り上げられている⁽¹¹⁾。また、この『半日閑話』は清次の話を奉行所が取り調べ、書き付けたものを筆写・掲載した形をとっており、その書状の宛て先が「河内守様御番所」とあり、当時の町奉行であった初鹿野河内守のことを指すと思われる。さらに後年の1957年7月17日付の『読売新聞』のコラムにもこの話が、ユーモラスに書き換えられて掲載されている。そこには、「文左衛門と清次に困る風の神」という川柳が記されており、清次が疫神（かぜの神）に遭遇し、除疫の呪法を授かり人気が高まった話が、当時、紀伊国屋文左衛門の成功譚と同格に扱われていたことを物語っている⁽¹²⁾。なお、この縁起譚のモチーフは以下の通りである。

- ①清次の前に、海の中から「異容の神人」が現れる。
- ②（神人の請いに対して）清次が、神人に釣った魚をあげる。
- ③そのお礼として、神人から防疫の方法を授かる。
- ④その呪法とは、「つりふねせいじ」と書いて戸口に貼っておくというものである。
- ⑤果たして、その通りにするとよく効果があらわれ、世間に広まる。

前記した、蘇民将來說話と比較してみると、その構成要素も、話の展開も

かなり類似している。江戸時代中期というこの縁起譚の成立年代を考えると、蘇民将来譚の流れを汲む、もしくは非常に強い影響を受けている可能性が高いと思われる。仮に、蘇民将来譚の影響を直接受けていないとしても、何らかの形で、このタイプの疫神歎待譚が流布しており、それが基となった可能性があると考えられる。

(二) 越前湯尾峠の孫嫡子

次に「越前湯尾峠の孫嫡子（ゆのおとうげのまごじゃくし）」と呼ばれる呪符の縁起譚を分析してゆくことにしたい。ハルトムート・オ・ローテルムンドは『疱瘡神』の中で、疱瘡神を除ける呪法の一つの、「疫病除けで名高い地名の出自であることを示すことによっておこなわれる」呪法として、この孫嫡子（このように書かれることもあった）を紹介している⁽¹³⁾。しかし、これは大島建彦の「湯尾の孫嫡子」にもあるように、マンネンタケ、もしくはマゴジャクシとよばれた、「靈芝」への信仰によるもので、地名への信仰ではないと考えられる⁽¹⁴⁾。元来、この福井県南条郡今庄町にある湯尾峠は、北陸街道の難所として有名であり、「上り三里に下り三里」と称されるほどであった。そこに少なくとも明治初年までは四軒の茶屋が立ち並び、その茶屋において孫嫡子の呪符と略縁起が頒けられていたという。その略縁起の内容は以下の通りである。

むかし一条院の頃のこと、湯尾峠の茶屋で疱瘡神と安倍晴明が出会い、疱瘡の病について論じあった。そのとき疱瘡神は、その病がどのようなものか、今見せてやろうと行って、ただちに茶屋の娘を、苦しませてみせた。晴明は疱瘡神の力に恐れ入り、「今は到底、力が及びません。ですから、ここは一つ人々の疱瘡が、軽く済むようにして下さい。」と頼み込んだ。そこで、疱瘡神は一枚のお札を出して、「この札を持つ家は、孫・嫡子に至るまで疱瘡が軽く済む」と言い残したという。ちなみに、その札には「湯尾峠御孫嫡子（星印）」と書かれている。

この話のモチーフを分析してみると、次のようになる。

① 疱瘡神と安倍晴明の登場。

②疱瘡神がその力を見せ、ただちに娘を苦しませる。

③その力に晴明が恐れ入り、神に疱瘡が軽く済むように頼む。

④その札を持つ家は、子孫に至るまで疱瘡が軽く済むというお札を残す。

以上の展開を、基本のモチーフと比較してみると、基本モチーフの(1)に対応するのが、①・②である。孫嫡子の話では、疱瘡神と共に、験力の強い陰陽師・安倍晴明をさせている点が、注目される。『越前国南条郡湯尾峠御孫嫡子略縁起』には⁽¹⁵⁾、晴明が疱瘡神の残した札に、「供に守べし」といって封印を書き加えた、と記されているから、晴明はお札にさらに威力を加える存在としても登場していることとなる。つまり、基本モチーフ(1)の「外部からやって来た(強力なる)神」に近いものとして、とらえてかまわないであろう。次に③が基本モチーフ(2)に対応するののか、という問題であるが、「恐れ入る」ことと「頼まれる」ことによって疱瘡神が機嫌を良くしたならば、(2)に適応するが、まだしばらくの検討が必要と思われる。そして④はそのまま(3)・(5)に当てはまる。前記した「釣船清次」ほどではないが、基本モチーフの流れを受け継いでいるようである。

(三) 「ささら三八」の縁起譚

次いで「ささら三八」について考察を加えたい。ささら三八は「佐々良三八(三八郎)」、「籧三八」とも書かれ、猿を連れた振袖前髪の青年武人「笹野歳三(才蔵)」と同一視、もしくは関係付けられており、柳田国男もそのことを指摘しているとされる⁽¹⁶⁾。『総合日本民俗語彙』によれば、「ささら三八」というのは壱岐において若衆が笹を担ぎ、御幣を持った猿を伴う姿で描かれた札をさしており、門戸に貼り、疫病を除けるとされている⁽¹⁷⁾。また、大島建彦が「ささら三八考」で指摘しているように、「ささら三八」は過去の様々な文書に記されており、以前から全国に広く分布していた除疫の呪符と考えられる⁽¹⁸⁾。しかし、笹野歳三とささら三八とは異なった伝承を持っており、笹野の方は後で触れるが、疫神を退治することにより、またはその豪胆な力によって除疫しようとするものであり、三八の方の話は疫神歓待譚であって、今回のテーマに即したものとイえる。また、ささら三八の伝

承を基にしたと考えられる読本に、山東京伝の『昔話稲妻表紙』巻二「五厄神の報恩」がある。以下に本文を紹介したい⁽¹⁹⁾。括弧内の注釈は筆者によるものである。

・・・その（主人・なむ右衛門＝ささら三八）留守の間、一子栗太郎此時年八歳なりしが、疱瘡をやみ、母磯菜（いそな）が辛勞おほかたならず。（中略）よきといふことは皆仕つくして、看病（みとり）けるが、いとおもき疱瘡にて、熱気つよく目をひきつけて、今もたえているかとおもふこと度々なり。（中略）さまざまにこしらへなぐさむれど泣止ず。殆（ほとんど）もてあましたる折しも、なむ右衛門一月（ひとつき）ぶりにて家にかへる。磯菜喜び出むかへて、まづ栗太郎が事を語るにぞ、なむ右衛門氣づかひ、いそがはしくやぶれ屏風をひきあけて、様子を見るに、今までなきさげびて、もてあましたる栗太郎、なむ右衛門を見て、禮（いや）正しく座をつくり、手をつきていひけるは、こはおもひかけざる事かな。此家はおん身の宅にて此小児はおん身の子息にて候か。これは前の月木津川の渡場にて、危難を救（すくい）たまはりし老女にてはべり（侍り）。我實は疱瘡の神なるが、我輩犬をおそるゝ事人に過たり。我しばらく京都にありて、痘瘡（もがさ）をやましめたるが、四五日さき當国にうつり、おん身の家ともしらず、こゝに宿し、此小児につきて疱瘡をやましめぬ。元來此児難症にて、今一兩日を過れば落命すべき所なるに、危急の節おん身歸宅したまひしは、畢竟此児の命つき處なり。前の日の厚意を報るは此時なり。我とみに立去（る）べし。我去れば疱瘡速（すみやか）にかせおちて平癒すべきなり。此すゑとてもおん身の族の家には立よらすまじ。しるしなくては此度のごとく誤（あやまつ）ことあるべし。おん身の姓名はいかにと問（う）にぞ、なむ右衛門その實名を告れば、しからば鮑貝（あわびがい）のうち（内）に、さゝら三八宿とかきつけて簷（のき＝軒）にかけおき給へ。その目じるしある家には、我は勿論ともがらの者をも立よらすまじ。はやいとま申すなりといひをはり、栗太郎悶絶してたふるゝと見えしが、老女の姿けぶりのごとくあらはれ、外のかたへ走り出てきえ失ぬ。

(以下略)

ちなみに、この物語によって(六字)南無右衛門の本名が「ささら三八」であることがわかる。なお、この話の展開は以下のごとくである。

- ①(以前に)ささら三八が、山城の木津の渡しで、犬に囲まれている老女に出会う。
- ②三八は犬を打ちちらして、老女を助けてやった。
- ③(三八の子供に憑いて)老女は自分が疱瘡神であることを明かし、以前のお礼として三八の子供を疱瘡から救い、アワビの貝殻に「さゝら三八宿」と書いて、軒に掛けておきなさい、その目印がある家には、我々の仲間も入らないであろう、と教えた。

まず①・③は、老女に身をやつした疱瘡神が現れ、基本モチーフの(1)と一致する。②はそのまま(2)に当てはまり、③は(3)・(4)を充たす。特に、アワビの貝殻に「さゝら三八宿」と記して、目印にするというのは(4)の内容と見事に合致する。つまり、これが除疫の呪符の役割を果たしているのである。また、後になって老女が正体を現すところは、蘇民将来譚の武塔神と一緒にいる。神への作善の方法は異なるものの、蘇民将来譚とはほぼ一緒の構成である。ちなみにこの「ささら三八」譚には、紹介したように三八郎の別名「六字南無右衛門」のものなど、様々に派生した伝承が多くある。

(四) 若狭国組屋六郎左衛門

この「若狭国組屋六郎左衛門」は全国的に流布している疱瘡除けの呪符であり、その呪符も数パターン存在している。その内訳はまず第一にその姓名を記した札「若狭国組屋六郎左衛門(宿)」。第二に後に触れるが、六郎左衛門が遭遇した疫神の姿を描いた札(御影札)。そして第三に六郎左衛門宛に書かれた、いわゆる「疫神の詫び証文」形式のもの三つである。大島によればこの詫び証文は、関東地方に多く流布しており、1999年5月現在58例を数えているという。詳しくは大島「疫神の詫び証文」を参照されたい。

ちなみに、組屋六郎左衛門は実在の人物であったという。昭和9年8月31日付の若州新聞に次のような記事が掲載された。それは福井県小浜市の28代続名家・組屋六郎左衛門方で、六郎左衛門は疱瘡の守り神といった内容の古文書『疱瘡の守神略縁起』が発見されたというものであった。それでは、その縁起譚を意識して以下に記したい。

永禄年中（1558年～1569年）、廻船問屋で豪商であった組屋六郎左衛門の船が航海の途中に風難にあった。すると船中に翁が現れ、船頭に「汝ら驚き騒ぐなかれ、我、この船に乗り居ればあやまちはないだろう」といった。果たして一陣の風が吹いて、船を送る速さは放たれた矢のようで、一日もかからずに母港である小浜に着いてしまった。これを聞いた主人の六郎左衛門は翁を家に招待し、翁の容姿の凡庸でないのを見て、厚く敬って丁寧にもてなした。これに翁は大喜びして「汝が常に神仏を崇め、貧者に施すというその陰徳を我は知っている。だからあの船に乗って来たのだ。我は疱瘡を司る神である、今からずっと汝の家に疱瘡の難が起ることを無くしてやろう。例えあったとしても、重きは軽く、多きは少なくしてその病痕を見えなくしてやろう」といって一個の珠を与え、「汝の家だけでなく他の土地の者でも、汝の家に縁ある者にはこの珠の水を用いて、汝の姓名を記して与えよ。その者がそれを門戸に貼るかお守りにしていれば、我が必ず守護し疱瘡の不安から救ってやろう。汝の子孫の代になってもそれは変わらない」といって行方知れずとなってしまった。間もなく世間に疱瘡が大流行したが、教えられたように六郎左衛門の姓名を記して人に与えると、一人も疱瘡に罹る者はいなかった。よって翁を描いて家の宝とし、代々守り札を与えていたが、疱瘡に罹ることがなかったので、世に広まっていった。

また、この組屋六郎左衛門の伝承は宝暦年間の『拾権雑話』巻十二にも掲載されている⁽²⁰⁾。上記の伝承といささか異なるため、以下に紹介したい。

組屋六郎左衛門家に伝り候疱瘡の神の事は、永禄年中に組屋手船北國より上がりし時、老人便船いたし来り、六郎左衛門方に着、しばらく止宿にて発足の時、我は疱瘡神也、此度の恩謝に組屋六郎左衛門とだに聞は疱瘡安く守へし、とちかひて去ぬ。六郎左衛門其時の姿模様を画にうつして留し也。今有所の物かくの如し。寛延年中京大坂にて開帳あり。

この『拾椎雑話』掲載の縁起譚のポイントは、主人公たる六郎左衛門の作善が老人の便船を許したことと、しばらく止宿させたことにある。「略縁起」にあるように、疱瘡神たる老人（翁）が船上で奇跡を起こしたり、その容姿が凡庸でなかったため、手厚くもてなした事など打算的なものではないのである。つまり、どちらが元来の形であるのかは解らないが『拾椎雑話』のものの方が、より自然な作善をしていると考えられるのである。その方が説話として違和感なく聞き手の耳に入って行きやすいのではないだろうか。

それでは例によってこの話のモチーフを整理することにしたい。

- ①組屋六郎左衛門の商船に老人が現れる。
- ②小浜港に着き、六郎左衛門の家に泊め、手厚くもてなす。
- ③老人が疱瘡神であることを打ち明け、今回のもてなしに対して、組屋六郎左衛門と表示してあれば、もしくはその名前を聞いた場合は、疱瘡から免れることを約束して去っていった。
- ④間もなく疱瘡が流行するが、六郎左衛門の名前の書かれた札をかかげた家は、だれ一人として疱瘡に罹らなかったという。

このように、組屋六郎左衛門の説話は細かな装飾的表現や、疱瘡神の神像や珠など異伝が付随するものの、その構造を取り出してみると、①が（1）に対応、②が（2）に対応、③が（3）・（4）に対応し、④は（5）に対応するといったように基本のモチーフと全く一致することが明らかである。ただし、かの老人が六郎左衛門の徳を慕い船上に現れたのか、ただ単に船に乗せてやったのかで作善の度合も変わってくると思われる。

結びにかえて

以上の四つの例を見てわかるように、疫病除けの呪符の根源には、多く疫神歎待譚があることがわかる。他にも除疫の呪符として、「疫神の詫び証文」の形をとる呪符があるが、先程の「若狭国小浜の組屋六郎左衛門」や「小川与惣右衛門 船にて約束の事」、「仁賀保金七郎」などの名前が宛て先となっているものがある⁽²¹⁾。とりわけ、仁賀保金七郎は疫神を歎待したのではなく、捕り押さえたのであるが、疫神となんらかの接触を持ち、疫病を除ける約束を交わすなど、疫神歎待譚に類似する点も多い。しかし、この話には疫病・疫神が恐れをなして、寄り付かないほどの力の持ち主による、疫病除けの思想も含まれている。この思想は疫病除けの呪符の、もう一方の大きな流れとなっている。ちなみに、八丈島において源為朝が痘瘡神（異形の老人）を叱りつけて島に近づかないように約束させた縁起譚を持つ「鎮西八郎為朝宿」や⁽²²⁾、加藤清正と並ぶほどの豪傑であったという前出の「笹野才蔵」、唐の国で玄宗皇帝の夢に現れ疫鬼を退治したという「鍾馗」の札⁽²³⁾、仏典において疫病を司る神である牛頭天王を食すという神「天刑星」の札などもこの流れのものといえる。

それはともかく、小稿で検討した疫神歎待譚による呪符の成立の原理は、少し異なった形の除疫の呪法にも表れている。その一例を挙げるならば、江戸時代の『古今雑談思出草紙』や『遊歴雑記』に掲載された、国府津安平の家から出された除疫のお守りの縁起譚であろう⁽²⁴⁾。この場合は呪符ではなく呪物である点がその大きな違いである。その内容を整理すると次のようになる。

- ①元和元(1615)年の大晦日の夜、安平は美しい童子を屋敷に泊めてやった。
- ②すると童子は痘瘡神であることを告げ、昨夜のお礼として安平の子孫が痘瘡に罹らないようにすると約束し、着ていた織物の小袖を脱ぎ与え、毎年の大晦日の夜に水を供えて自分を祀るように言い残して消えた。
- ③果たして国府津の家の者は、全く痘瘡を患わず、国府津の家から痘瘡除けのお守りを借りると、痘瘡で死ぬことは決してなかったという。その

お守りというのは、例の小袖を縫いこめたものであった。

これらを基本モチーフと比較すると、①が(1)と(2)、②が(3)、③が(5)に当てはまる。呪力を持つものが物であるか、符であるかの別はあるものの、その縁起譚の構成は甚だ類似している。さらに小袖という呪物である点に注目するなら、呪物であるが故に基本モチーフの(4)を充たせないのであるが、一つしかない小袖を持っているということは、他者との区別という点においては条件を充たすものといえる。しかしこの小袖が、童子が約束を守る証拠として置いていったのか、国府津安平の家の者であるという、他者との区別のために残したのかは判定しかねる問題である。いずれにしろ、疫神歎待譚は縁起譚として多く用いられてきたのである。

またハルトムート・オ・ローテルムンドは、疫病除けの呪法を、「空間の転換・時間の転換・人称の転換」の三つにわけており⁽²⁵⁾、この節で考察していった疫神歎待譚は、その「人称の転換」による呪法・呪符の根源となっている。その疫神歎待譚の中では、文献資料や考古資料から考えても、蘇民将来譚がその祖型である可能性が、極めて高いと思われる。また、言い換えるなら、蘇民将来譚が時の流れと共に、一方ではその構成要素やモチーフを継承しつつ、他方では様々な形に変化していった可能性が高いのではなからうか。そうは言えないまでも、日本の疫病除けの呪法・呪符の根源に、強い影響を与えたことは確実といわざるを得ないだろう。

<註>

- (1) 大島建彦 1985『疫神とその周辺』岩崎美術社。そのうち特に「疫神と福神」「疫神研究の課題」の2論文を参考にさせていただいた。
- (2) 大塚民俗学会編 1972『日本民俗事典』弘文堂 270頁。
- (3) 宮本升平 1999「蘇民将来の研究」(『民具研究』119号日本民具学会)。
- (4) 末武保政 1976『黒石寺蘇民祭』文化総合出版 13頁。
- (5) 志賀剛 1981「日本に於ける疫神信仰の生成」(佐野賢治編 1994『星の信仰』溪水社) 195頁。

- (6) 山本ひろ子 1998『異神』平凡社 511頁。
- (7) 奥野義雄 1997『まじない習俗の文化史』岩田書院 232頁。
- (8) 現在は東京都杉並区和泉にある。
- (9) 大島建彦 1981「釣船清次の信仰」『疫神とその周辺』前掲書。
- (10) 長沢利明 1988「釣船神社の系譜」『東京の民間信仰』三弥井書店。
- (11) 大島建彦 1981「釣船清次の信仰」前掲論文。
- (12) 大曲駒村 1955『川柳大辞典』日文社 922頁。
- (13) ハルトムート・オ・ローテルムンド 1995『疱瘡神』岩波書店 66～67頁。
- (14) 大島建彦 1981「湯尾峠の孫嫡子」『疫神とその周辺』前掲書 128～130頁。
- (15) 大島建彦 1981「湯尾峠の孫嫡子」前掲論文 128～129頁。
- (16) 大島建彦 1998「ささら三八考」『西郊民俗』155号 西郊民俗談話会 1～2頁。
- (17) 民俗学研究所編 1955『総合日本民俗語集』第2巻 平凡社 627頁。
- (18) 大島建彦 1998「ささら三八考」前掲論文による。
- (19) 本文は、日本名著全集刊行会編 1927 日本名著全集『読本集』192頁。
- (20) 大島建彦 1985「疫神の詫び証文」『疫神とその周辺』前掲書 82頁。
- (21) 前掲論文「疫神の詫び証文」に詳しく紹介されているので、そちらを参考にされたい。
- (22) ハルトムート・オ・ローテルムンド 1995『疱瘡神』前掲書 112頁。
- (23) 窪 徳忠 1986『道教の神々』平河出版社 292～296頁。
- (24) 大島建彦 1977「疫神と福神」『疫神とその周辺』前掲書 5～6頁。
- (25) 前出のローテルムンドは疱瘡除けの呪法の原理として、三つの転換を提示している。その第一が空間の転換であり、疱瘡神が侵入可能な場を不可能な場に転換させることであり、疱瘡神が既に訪れているように装ったりすることを例としている。第二の時間の転換とは、大晦日に訪れるとされる疱瘡神に対して、「野老(ところ)」などの正月や吉日を連想させる語を書いた札を掲げることにより、疱瘡神の来る時期ではないことを示し、近づかせない呪法である。そして第三の人称の転換は、本稿のテーマである蘇民将来や、疫神を懲らしめた豪傑の名前を掲げて、その者の家と思わせて侵入させない呪法である。(ハルトムート・オ・ローテルムンド 1995『疱瘡神』前掲書

引用文献及び参考文献

- 大島建彦 1977「疫神と福神」(1985『疫神とその周辺』岩崎美術社)
1981「釣船清次の信仰」『疫神とその周辺』前掲書
1981「湯尾峠の孫嫡子」『疫神とその周辺』前掲書
1985「疫神研究の課題」『疫神とその周辺』前掲書
1985「疫神の詫び証文」『疫神とその周辺』前掲書
1998「ささら三八考」『西郊民俗』155号 西郊民俗談話会
- 大曲駒村 1955『川柳大辞典』日文社
- 大塚民俗学会編 1972『日本民俗事典』弘文堂
- 奥野義雄 1977『まじない習俗の文化史』岩田書院
- 窪 徳忠 1986『道教の神々』平河出版社
- 志賀 剛 1981「日本に於ける疫神信仰の生成」(佐野賢治編 1994『星の信仰』
溪水社)
- 末武保政 1976『黒石寺蘇民祭』文化総合出版
- 長沢利明 1988「釣船神社の系譜」『東京の民間信仰』三弥井書店
- 日本名著全集刊行会編 1927 日本名著全集『読本集』日本名著全集刊行会
- ハルトムート・オ・ローテルムンド 1995『疱瘡神』岩波書店
- 山本ひろ子 1998『異神』平凡社